

優秀賞

小学生部門

本宮市立本宮小学校 6年

庄子 諒太

たいしたもんだ

今年の冬、あのがんじょうなじいちゃんが亡くなった。じいちゃんは天国からぼくを見てくれている。

じいちゃんは歴史が大好きで、昔はみんながびんぼうで苦しかったけど、勉強すれば立派な人になれるって教えてくれた。ぼくが、宿題をしていると、ノートを見て、「こんなむずかしいのを勉強しているのか、諒太はたいしたもんだ」と言ってくれた。それに、しょうぎも強かった。いつもじょうだんばかり言っているのに、しょうぎになると無口になる。最初は負けてばかりいたけど、初めて勝ったとき「やっぱり諒太はじいちゃんの孫だ、たいしたもんだ」と頭をなでってくれた。

そんなじいちゃんが、体を悪くして何回も入退院を繰り返すようになった。お見まいに行くと「ありがとう。いそがしいのに来てくれたのか。たいしたもんだ」と笑ってくれた。ぼくは心の中で思った。おみまいはぜんぜんたいしたことじゃない。当たり前のことだ。だって、ぼくのじいちゃんだもの。

次第に、おじいちゃんのご飯も食べられず点てきの生活になってしまった。ぼくはスポーツや行事でお見まいに行く回数がへり、お母さんにも怒られてしまった。ある冬の日、じいちゃんは目も開けられず、話もできなかつた。僕は手をにぎった。手はとても冷たくなつていた。翌日、じいちゃんは七〇年の人生を終えた。

じいちゃんこそ、たいしたもんだよ。貧しかったけど、お母さんやおばあちゃんや、ぼくたちを育ててくれたじゃないか。あの、しょうぎだって、じいちゃん、ぼくのことを悲しませないようにわざと負けたのでしよう。じいちゃんのやさしさは、たいしたもんだよ。じいちゃん、ぼくは約束する。じいちゃんが一番好きなおばあちゃんを、じいちゃんのかわりに守ってあげるよ。そのとき、天国から「たいしたもんだ」と言ってくれるかい？